

聖書：ローマ人への手紙 8：18～25

説教題：御霊の初穂

日時：2022年6月5日（朝拝）

3年前からペンテコステ記念礼拝の日には、ローマ書8章を順番に取り上げて説教させていただいています。ローマ書8章には聖霊がたくさん出て来て、1～30節までの間に何と19回も出て来ます。ご存知の通り、ローマ書8章はローマ書の一つの頂点と呼ぶべき章で、クリスチャンの救いの確かさと勝利が高らかに歌われています。その章に聖霊が繰り返し出て来るということは、いかにクリスチャン生活に聖霊の働きが欠かせないかを示していますし、その勝利ある生活のためにいかに私たちは聖霊の働きについて良く知り、そこに私たちの慰めと力を見出すべきかということになります。

さて今日は18～25節を取り上げますが、ここで聖霊が出て来るのは1か所だけで、それは23節の「御霊の初穂」という部分です。今日はこの言葉に焦点を当てて、御霊の働きについて学びたいと思います。まず「初穂」とは何でしょうか。初穂とは収穫の最初に取りれるもののことです。聖書の中で「初穂」という言葉で思い起こす箇所はどこでしょうか。おそらく多くの方々が思い起こすのは、Iコリント15章20節の「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中からよみがえられました」ではないでしょうか。キリストは死者の中からの復活の第1号として、その先駆けとして復活されました。そのキリストの復活は後の信者たちの復活の保証となるものとして語られています。では今日の箇所の「御霊の初穂」とはどういう意味でしょうか。御霊はキリストを信じる信者たちの内に住んでおられます。最近学んだIコリント6章19節にも「あなたがたのからだは、神から受けた聖霊の宮である」と言われていました。ローマ書8章でも9節に「しかし、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら」とありました。これは「神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるのですから」という意味です。この御霊が初穂であると今日の箇所で行われています。御霊という初穂を私たちはいただいているという意味です。御霊を指して「初穂」と言われています。では何の初穂なのでしょう。それは18節からの流れを見ると分かりますが、18節の言葉で言えば「やがて私たちに啓示される栄光の」ということでしょう。将来完全に明らかにされる天の御国の祝福の初穂です。ごく簡単に言えば、御霊は天国の祝福の初穂ということです。

この「初穂」というイメージでまず考えるべき真理は、初穂はその後にやって来る本格的な祝福と同じ種類・同じ質のものであるということです。「初穂」は農業のイメージの言葉です。農夫は収穫の 때가 近づくと、畑に行つて少しばかりの穂を もんで家に持ち帰つて来ます。そして今年収穫されるものはどんな味がするか、まずこれでパンを焼いて味わつてみよう！と言います。本格的な収穫はこれからです。それは将来に属しています。彼らはその日を待ち望んで来ました。春に種を蒔き、夏の間、何か月も様子を見ながら待ち続け、ついに収穫の 때가 近づいています。農夫は、それがどんな味がするか早く試してみたいと願う。そしてその初穂を使って焼いたパンを口に入れた時、彼らはこれから将来収穫するものと同じ種類の味を味わうのです。そしてそれが美味しければ幸いです。今年のもは美味しい！美味しいものがいよいよ取れそう！と心膨らませることになります。そのように私たちは聖霊を受けることによって天国の味を味わっています。天国は基本的に将来に属していますので、その味は本当は将来にならなければ分からないはずですが、しかし御霊が初穂として私たちに与えられていることによって、いわば将来が現在に突入するという出来事が起こっている。信者はまだ天国に行っていないが、天国の味を先取りして味わう者とされているのです。

同じ内容のことを別のイメージで語る言葉として「保証」という言葉が聖書にあります。Ⅱコリント 1 章 22 節、5 章 5 節、エペソ 1 : 14 では、御霊を指して「保証」と言われています。エペソ 1 章 14 節には「聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です」とあります。そしてどの箇所でも「保証」という言葉には印がついていて、欄外に、直訳は「手付金」と記されています。初穂は農業のイメージですが、手付金は商業のイメージの言葉です。手付金とは何でしょう。それはこれから支払うものの一部です。頭金です。分割して払うお金の初回分です。つまり聖霊はやがて私たちに与えられる御国の祝福の頭金に相当します。手付金としての聖霊を受けることによって、私たちはやがて受けるものと同質の祝福を今ここで受け取り始めているということになるわけです。

具体的に聖霊を通して与えられる神の国の祝福とはどのようなものでしょうか。参考になるみことばとして、ローマ書 14 章 17 節にこういうみことばがあります。「なぜなら、神の国は食べたり飲んだりすることではなく、聖霊による義と平和と喜びだ

からです。」ここに神の国は「聖霊による義と平和と喜び」とあります。この義と平和と喜びとは、もっと具体的にどんなことかについて良い注解はローマ書 5 章 1～5 節です。5 章 1～2 節：「こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます。」ここに「義」と「平和」と「喜び」のすべてが出て来ています。義とは信仰によって義と認められたこと。平和とは義認に基づいて与えられる神との平和のこと。そして喜びとは神との平和に基づいてクリスチャンが将来行き着くゴールである栄光を望み見るがゆえの喜びです。これらは聖霊によると 14 章 17 節に言われていました。確かにこれらは世の人々が知らないこと、味わっていないことです。世の中の一体誰が、キリストを通して神の前に自分が義と認められていると知る幸いに生きているでしょうか。また世の中の誰が神との平和、すなわち恐れずに大胆に神に近づき、神と交わる幸せを知っているでしょうか。また世の中の誰が、行く手に栄光が備えられていること、神の栄光を映し出す者とされることを望み見て大いに喜ぶという幸せを知っているでしょうか。これらは聖霊によって私たちが経験している喜びであり、御国の先取りであり、その前味です。私たちはこのペンテコステの日、まずこの聖霊による祝福を感謝したいと思います。御霊が初穂として私たちに与えられており、その方が私たちの内に住んでいてくださるので、私たちはその方において、やがて来るものの味、天国の前味をすでにここで味わい始める者とされています。これはただただ聖霊の働きによることなのです。

さて私たちはこのように初穂なる御霊を通して将来の味を知る者とされていますが、それは後に来るものに比べればまだ始まりの部分にしか過ぎません。やがて来る本格的な収穫のごく一部です。私たちはまだ御国の最終状態の祝福は味わっていません。そんな私たちは今、この世にあって様々な苦しみの中にも置かれています。それが 18 節の「今の時の苦難」という言葉に表されています。これは私たちが地上で経験するあらゆる苦しみを含むものです。時にその苦難によって、私たちが味わっている喜びがかき消されそうな状況に至ることもあるかもしれません。しかしパウロは 18 節で「今の時の苦難は、やがて私たちに啓示される栄光に比べれば、取るに足りない」と言います。これを支えるのが聖霊であるということです。このやがての栄光にあずかるまでの期間、私たちを特徴づけるものは「うめき」であるということが 19 節以降に記されます。このうめきは単にこの世で苦しいことが多くて「うめく」という

ことではありません。これは御霊の初穂を私たちがいただいていること、御霊によってやがての御国の味をいくらかでも真実に知っていることと関係します。前にもお話したことがあります、私はこのことで私の中高生時代のことを思い起こします。部活動を終えて、夕方にお腹を空かせて家に帰り、台所を通ると、よく母は「はい！今できたもの」と言って、作り立てのおかずを口に放り込んでくれることがありました。揚げたばかりのカツの端っことか、あるいはできたばかりのおからとかおかずを小皿に少々取って、とか。それらは出来立て熱々ホクホクしていて美味しい。まさにこれが前味です。後に来るものと同じものです。それを食べて私はどう思うでしょう。もっと食べたい！と思うのです。もう少し欲しい！と願うのです。しかし母からは「あとご飯の時にしなさい」と言われます。するとどうなるでしょう。私はうめくのです。もっと食べたいのに！とある意味でストレスがたまる。しかしこのうめきは希望と結び付いています。もう少しすれば、あれをもっと一杯、本格的に食べられるという希望です。このローマ書で言われているのも、同じように将来の希望と結び付いたうめきです。

パウロは後に来る栄光の状態がどんなに素晴らしいものかを示すため、まず 19～22 節では被造物のうめきについて語ります。ここは大変興味深く重要な箇所ですが、今日はポイントだけ触れます。ここに神に造られたこの世界は熱心に救いの日を待ち望んでいると言われています。この世界は本来良いものでした。創世記 1 章 31 節で、神はご自分が造られた世界全体を見て「非常に良い」と言われました。しかしこの世界を治めるべき人間が罪を犯したことによって虚無の状態に落ちたと言われています。本来意図された状態から大きく落ちた状態です。罪の呪いを被ることになりました。しかしその世界にも望みがあります。神は創世記 3 章 15 節のいわゆる原始福音と呼ばれる箇所で、人間の救いを約束してくださいました。その人間の救いとセットで、自分たちも本来の栄光の状態に戻ることができるという希望です。21 節に「被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります」と言われています。その日を目指して世界はうめいている。19 節の「切実な思いで」という部分には印がついていて、欄外に「首を長くして」と記されています。首を長くし、その日を望み見て待ち望んでいるというのです。「希望」が支配的であるのは 22 節の「産みの苦しみ」という表現からも分かります。出産のプロセスはある意味で苦しいものです。しかしその後新しい命が誕生するという喜びが待っています。その喜びの時を見つめてうめくのです。このように世界全体は希望の調べとセットになっ

たうめきのシンフォニーを奏でていると聖書は語ります。私たちに将来与えられる救いは、このような世界全体の回復と一体になっているものです。世界はそのために、私たち神の子どもたちの最終的救いを待ち望んでいます。

その世界と一緒に私たちも今うめいています。そのうめきは将来の望みとセットです。23 節に、その望みとして「子にさせていただくこと」とあります。私たちは今すでに神の子どもたちとされていますが、その輝かしい身分がはっきりと公に現わされるのはやはりやがての日です。「神の子どもたちの栄光の自由」と 21 節で表現されている状態に至るのはやはり最後の日です。またその日は私たちのからだが贖われる日でもあります。あらゆる弱さから解放され、朽ちない、栄光に満ちた、強いからだに復活させられます。これがどんなに素晴らしい望みであるかが、最後の 24～25 節で強調されています。私たちが今、目で見ているレベルで将来の祝福を考えることはできないということです。今見ているものを望むという人はいません。今、見ているなら、それは現実に起こっていることであって、それを今さら望むというのはおかしいことです。むしろ私たちは今見ていないものを望みます。つまり私たちが望んでいるやがての祝福は、今の私たちの目が見ているレベルからは考えられないほどの、想像以上のものであるということです。そういう救いが私たちの行く先に用意されています。ですから私たちは忍耐して待つのです。うめきながら、先にあるものを望み見て、待つのです。そこに至るまで御霊は導いてくださいますし、御霊は初穂なる方として、そのことを保証してくださっています。その御霊の働きが、なおこの後の節にも述べられることになります。

主はこの日、天から聖霊を遣わしてくださり、私たち信じる者一人一人の内に聖霊を与えてくださっています。聖霊は初穂なる方として、私たちに将来の味を真実に味わわせてくださっています。私たちはこの世にありながら、やがての御国に属する味を知る者とされています。この恵みに私たちがあずかっているのは、このペンテコステの日の下られた聖霊の働きによることを覚えて聖霊に感謝したいと思います。この聖霊に導いていただいて、御国の前味を益々豊かに味わう者とされたいと思います。また今の地上の歩みに多くの苦しみや困難があるとしても、聖霊によって将来のものを望み見てうめき、熱心に先のを待ち望む歩みへ導かれたいと思います。そしてパウロの 18 節の言葉のように、今の時の苦しみはやがて私たちに与えられる栄光に比べれば取るに足りないとは私は考えますと告白し、聖霊によって、神の子どもたちの

栄光の自由という最終的祝福に至らせていただく歩みへ導かれて行きたいと思ひます。